

椿展での光田和伸先生のご講演

「椿と日本文化」椿はどうして大和王朝と賀茂族の花になったか

○椿は古代の初期大和王権を象徴する花でした。古事記の仁徳天皇および雄略天皇の条に、それぞれの皇后が天皇を椿に喩えて賛美した歌謡が載っています。

仁徳天皇の後の磐の姫が仁徳天皇を

称えた歌。【(前略)葉廣 齋 つ真椿

其 が花の照り 坐 し 其 が葉の 廣

り坐すは 大君ろかも】大意：「大君(仁

徳天皇)は、葉の広い神聖な真椿、その花のように照り輝いていらして、その葉の

ように広いお心の持主であられますことよ。」また、**雄略天皇**(五世紀後半)の後

も、雄略天皇を称えて、次のように歌っています。【(前略)葉廣 齋つ真椿 其

が葉の廣り坐し 其の花の照り坐す 高

光る日の御子に 豊神酒 献らせ・・・】

【巨勢山のつらつら椿つらつらに 見つつ

思 はな巨勢の春野を】(万葉集 54番

坂門人足) この歌には**大宝元年**(701

年)秋九月の**持統上皇**の紀の国行幸の時の歌である旨の前書があるので、少な

くともこの頃まで椿は重要な花であった事が分ります。

【紫は灰指すものぞ **海石榴市** の八

十の 衢 に会へる児や誰】(3101番)

【あしひきの八尾のつばきつらつらに見ど

もあかめや植ゑてける君】(4481番 大

伴家持)(市註：椿が当時の邸宅に植えられていた証拠です。)

万葉歌人の内、赤人は久米族、人麻呂は猿田彦族です。首里城の守礼門や鳥居の赤色は久米島の赤土に起源があります。狛犬は印度の獅子↓沖繩のシーサー↓本土の狛犬の流れです。

○猿田彦族・久米族・出雲族等に残る「中国古代の殷・周文化」

猿田彦族は中国の雲南地方から沖繩(琉球)にやってきたのではないかと 中国

雲南の古代国家、**滇国**の通貨は寶貝で、寶貝を琉球から輸入していました。この貿易に猿田彦族が関与していたと見

られます。宮古島の寶貝を久米島(久米族の本拠地)経由で中国へ輸出してい

ました。従って、猿田彦族が雲南(滇国)の椿(市註：唐椿≡滇茶花)を日本に持

込んだ可能性があります。殷代の通貨、寶貝も猿田彦族が北方の殷まで運んだ

のではないのでしょうか。**久米歌**(古事記・日本書紀に記録される久米族の戦闘

歌)と孔子編の『詩経』の国風歌がよく似ています。久米族は猿田彦族の戦闘

部隊です。出雲の荒神谷遺跡・**加茂岩倉遺跡**に埋葬された銅剣・銅鐸はそのほ

とんどに「×印」が施されています。これは殷・周文化では『悪霊封じ』の記号と言

われています(白川静説)。

○殷滅亡後、猿田彦族は鉄をはじめとする多様な鉱物資源の開発に転じたと

推定されます。猿田彦族は鉱物資源を求めて日本全国の川を探索し、資源があると見た川の河口に目印として椿の木を植えました(椿はその種を鳥などが運ばないため、目印が移動しない)。また椿油はエネルギー源(食用・光源)あるいは鉄器類の錆止めに最適でした。川の例.. 別子銅山の近くの加茂川など。

殷の滅亡は紀元前十一世紀の中葉です。紀元前十世紀頃、猿田彦族は北九州に来て、稲作を担いました。奈良県田原本町の**唐古・鍵遺跡**は紀元前七世紀頃(皇紀元年頃)の遺跡と確定されましたが、この遺跡の担い手は猿田彦族と考えています。これを神武の功績として、ここから皇紀が数えられていると考えます。神武に象徴される一族が実際に大和に来たのは西暦二百年代の後半と考ええます。

スサノヲの名で記録された勇者の渡来時期は、紀元前百年前後です。猿田彦族が殷王朝の王家の末裔(スサノヲ)を招請した可能性があります。スサノヲの子孫は出雲の**祭祀王家**(出雲族)となり、猿田彦族は安曇・和邇氏として行政王家となりました。葛城の**加茂族**は大和へ進出した出雲族(大歳神系)で、大和の最初の**祭祀王家**(市註:いわゆる葛城王朝の王家)でありました。欠史八代(第二代から第九代の大王)は実在したと考えます。**椿**は王権を守る行政王家

(和邇氏)の象徴となり、新しい行政王家となる藤原氏が台頭するまで、椿は**国**の花と称えられました。

○しかし藤原氏が政治の中心勢力になる平安時代になると、椿は藤(藤原氏のシンボル)や梅に押されて、文学の世界から消えていきました。二十一集ある勅撰和歌集には「椿の花」の歌が一首も登場しません。しかし、女性の衣装の椿文、工芸品の蓬莱文(椿、松、鶴、亀、州浜)などに残ります。**蓬莱**は中国から見た東方海上の理想郷で、椿・松は日本の代表的縁起植物。鶴亀も日本の長寿動物で、中国にとつての蓬莱島は日本にとでありました。**徐福**一行はこの蓬莱国に理想郷を求めてやって来た中国の一団です。猿田彦族と協力して、日本の各地で長寿資源の発見に尽力したと考えられます。(市註:椿油がその一つであったのではないのでしょうか?)**山岳修験道**の笈の「椿文」(鎌倉彫)は葛城の加茂氏(修験道の祖、役行者)が関係しています。

【以下は市の補足】猿田彦は天照大御神を伊勢の神宮へ導いた神として、伊勢国の一宮である**椿大神社**に祀られています。この神社の周辺には椿(ヤブツバキ)の古木が多く、地名も椿です。猿田彦と妻の天鈿女は上賀茂の古社である**大田神社**(カキツバタ群落で有名)の神でもあります。(市 忠顕記)

